

国際的な視点から描画の解釈を再考する

星美学園短期大学 太田 研

環太平洋乳幼児教育学会（Pacific Early Childhood Education Research Association：PECERA）は、環太平洋地域の諸国から組織され、毎年7～8月頃に年次大会を開催しています。私は、2019年7月12～14日に台北にて開催された第20回大会に参加しました。PECERAへの参加は初めてでしたが、とても温かい雰囲気の大大会でした。英語が公用語ではない参加者も多く、参加者が互いに研究内容を理解しようと、ノンバーバルを活用しながらコミュニケーションを楽しんでいました。

私がポスター発表した内容は、「年長児の描画と園庭遊びの関連」を調べた事例研究です。描画は、描く人の興味や自己イメージを映し出すノンバーバルです。描画の解釈項目を整理することで、言葉での表現が難しい子どもや多様な母国語の子どもの感情や思考に近づくことが期待できます。研究では、実際の遊びの様子が描画に映し出されるのかを調べました。小型GPSロガーを用いて、一度に複数名の行動データを収集したことが独創的な点です。参加児6名中5名は、実際に遊んだ時間の長い固定遊具を描きました。しかし、1名は遊んでいない遊具や実際より多くの人物を描きました。担任との協議から、本児が他児との遊びへの願望を描いたことが示唆されました。

研究発表では、韓国、台湾、フィリピン、インドネシアなど、様々な国の方と協議しました。協議を通して、描画が万国共通の活動であることを再確認できました。ただし、国によっては棒人間を描く傾向が高く、描画を解釈する際に文化的影響を考慮する必要性を認識しました。そして、描画は日常的な活動であるものの、子ども理解への活用という視点は普及しているとは言い難い状況でした。このことは、現場の先生が子ども理解の一助として描画を活用するために、解釈項目の精選に向けて一層の努力をするよう私を後押ししています。今後も国際学会にて、自身の研究を多角的に検討したいと思います。